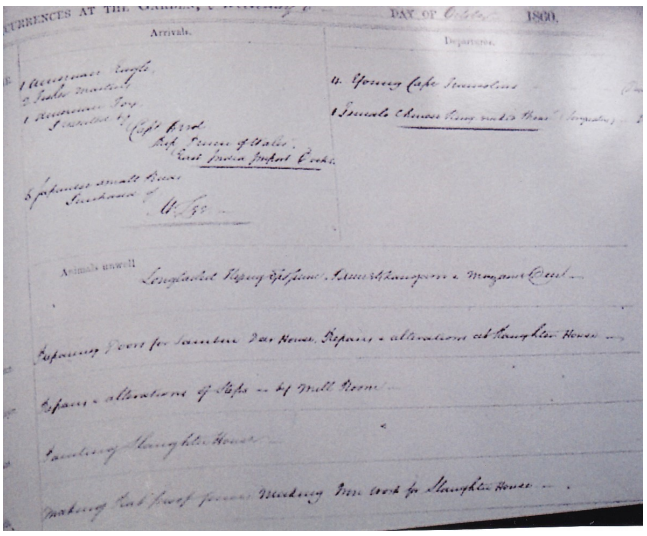
第2章江戸時代にイギリスへ渡った

▲ダーウィンが関心を持った白十姉妹

▲「ロンドン動物協会」の玄関



▲十姉妹渡英の記録

●白十姉妹が誕生して評判を呼んだ

江戸時代に中国から渡来した黒い十姉妹が、安政3年（1856年）に突然、白い十姉妹を誕生させた。渡来して94年後のことである。『武江年表』には、“近頃、十姉妹の異品を養ふ人多し”と記されている。当時、白十姉妹一番の値が1両2分といわれている。現在の値にすると16万円程度になる。

この鳥が何とイギリスへ渡ったのである。万延元年（1860年）のことだ。当時、イギリスでは博物学者ダーウィンの進化論『種の起源』（1859年）が激しい論争を巻き起こし、国際的な話題なった。

これは、それまでの生物の誕生は、すべて神が関与していたというキリスト教の教えが一般的であった。ところがダーウィンは、神とは関係なく、生物は環境により進化するという論陣を張り、生物の誕生に科学の光を投げかけたのである。そのことを江戸で知った当時の駐日大使オールコックが、イギリスの動物学会へ白い十姉妹を送ったのだ。

●動物学会に、その記録があった！

日本から白十姉妹が初めてヨーロッパへ渡ったのは、1860年で、ロンドン動物園で展示されたという。このことは、オランダやイギリスの十姉妹飼育者の間では常識だ。私は、その記録をぜひ見たいと思った。

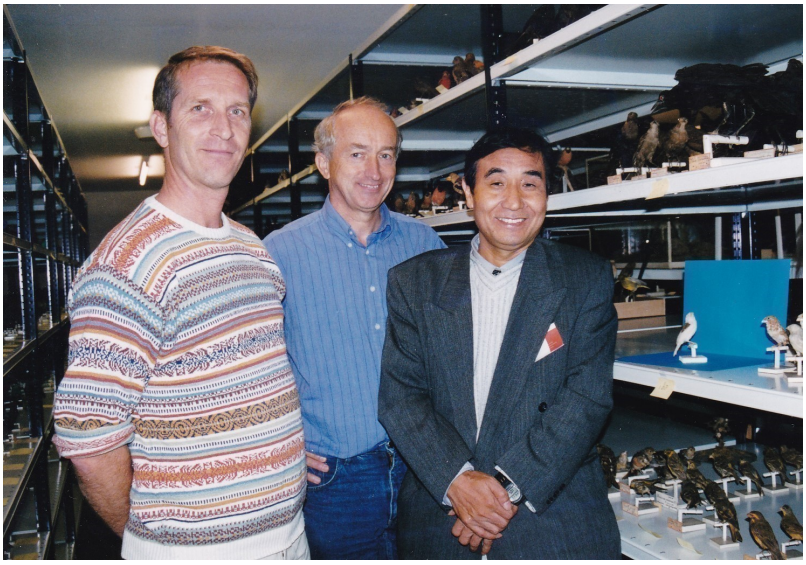
私がロンドンへ飛んだのは1997年7月である。ロンドン動物園の前にある「ロンドン動物学協会は、キリスト教の思想を広めるための協会で、地球上で神が作った動物をすべて収集し、記録に残すという事業を代々行っていた。

●十姉妹はロンドンの動物園で展示されていた

私は、この動物学協会で、当時の記録を見せてもらった。それが左記の図である。そこには、日本から“小さな鳥”がやって来たと記録されている。そして鳥の種は白いアミメと書かれていた。十姉妹を見たこともないイギリス人にはアルビノのアミメと目に映ったのかもしれない。

イギリスの十姉妹飼育団体「N・B・F・A」の40周年記念刊行誌には次の記述がある。「日本から最初に来た2羽の白い十姉妹は、1860年にロンドン動物園に展示された。当時はアルビノの白いアミメだと思っていた」と記述されている。

オランダの「国立自然史博物館」に明治時代の十姉妹！



▲右から鷲尾、パニオ氏、ダーカー氏

●白い鳥は宗教上の鳥

私はイギリスに次いで、1998年オランダへ飛んだ。ヨーロッパの十姉妹飼育団体「J・M・C」の会長であるフレッド・パニオ氏に会うためである。日本の白い十姉妹がイギリスへ渡った後、どのようにしてヨーロッパ中へ広がったのか。そのことを知りたいと思ったからだ。

日本の十姉妹が最初にヨーロッパへ輸出されたのはドイツである。明治5年のことである。当時の日本は、白十姉妹のほかに、黒褐色の小班十姉妹と茶褐色の小班十姉妹を輸出していた。

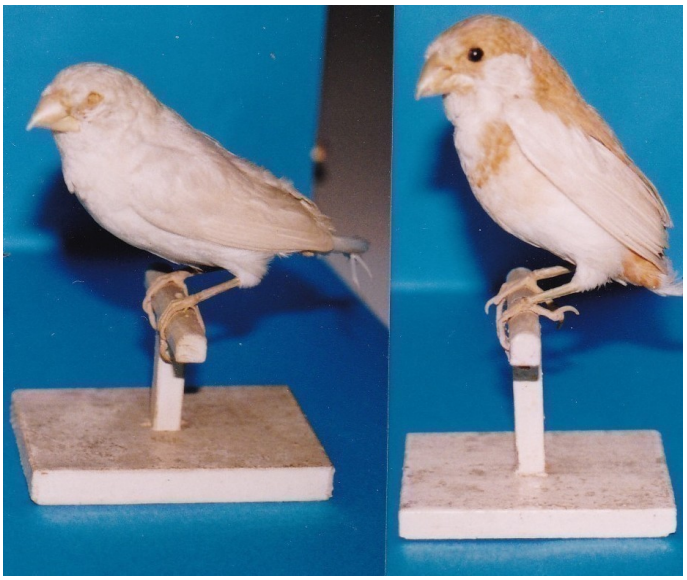
フレッド・パニオ氏の著書には、そのことが次のように書かれている。「日本人は十姉妹を白い羽の入ったさまざまな色彩の鳥に作り上げていた。このことは白い羽の鳥が宗教上の理由から縁起の良い鳥とされていたためである」。

▲黒い小班のパイド十姉妹

●1886年ハーグ動物園で飼育された十姉妹のはく製

私は2000年10月に再度オランダのパニオ氏を訪れた。それは江戸時代の医師フオーン・シーボルトが、日本の野鳥のはく製を大量にオランダへ送っていたからだ。『シーボルト日本動物誌』ではヒバリやウソ、ベニマシコ、ウグイスなど170種を送り、そのはく製の数は615種に及んだ。

それらのはく製は、オランダのライデン市の「国立自然史博物館」に所蔵されていた。そこでオランダの環境庁に勤務するパニオ氏にお願いして、同行してもらった。同博物館の鳥類のスペシャリストのドクター・ダーカー氏は「シーボルトは、日本から十姉妹を持って来ていない」といった。失望したが、明治時代の十姉妹のはく製はあるという。



▲アルビノと茶パイド十姉妹

●体型も色彩も、今の十姉妹と変わらない

私達は6階のはく製室を訪れた。ここはフインチのみ集められたはく製室で、文鳥やコキンチョウ、キンカチョウなどのはく製が見られた。その中で、黒い小班の十姉妹のはく製もあった。

ダーカー氏は、はく製の台の裏側の記述を見せ、「これは1886年（明治19年）にオランダのハーグ動物園から来たものです」といった。そのほかアルビノの十姉妹や茶の小班十姉妹のはく製も見せてくれた。つまり江戸時代の黒十姉妹は、明治時代には現在のカラフルなジュウシマツと同じ色彩となり、ヨーロッパでは飼育されていたのである。これには正直いって驚いた。